〈論　文〉

ロシアのアキレス腱は，集団化による「餓死の恐怖」を逃れるべく，ソ連市民が降伏し，受動化した所以か？

―― ラッセル 1920『ロシア共産主義』&
エルリフマン 2004『20 世紀の人口損失』再読 ――

Is Russia's Achilles' heel the result of Soviet citizens surrendering and becoming passive in order to escape the "fear of starvation" caused by collectivization?

―― Re-reading B. Russell (1920), *The Practice and Theory of Bolshevism* and V. Erlikhman (2004), *Population Loss in the 20th Century.* ――

佐々木　　洋

札幌学院大学経済論集　第20号（通巻20号）（別刷）

札幌学院大学 総合研究所

2024 年 2 月

札幌学院大学経済論集（2024）第 20 号　21-54

〈論　文〉

ロシアのアキレス腱は，集団化による「餓死の恐怖」を逃れるべく，ソ連市民が降伏し，受動化した所以か？

―― ラッセル 1920『ロシア共産主義』&
エルリフマン 2004『20 世紀の人口損失』再読 ――

Is Russia's Achilles' heel the result of Soviet citizens surrendering and becoming passive in order to escape the "fear of starvation"

[redacted]

―― Re-reading B. Russell (1920), *The Practice and Theory of Bolshevism* and V. Erlikhman (2004), *Population Loss in the 20th Century.* ――

ラッセル（1872-1970）は，1917年10月革命の三年後，1920年に英国労働党の訪ソ使節団に随行，内戦下のロシア両首都と農村部を長期視察，同年中に彼特有の，まさに歯に衣を着せない印象記『ボリシェヴィズムの理論と実践』を刊行した。

同書は「内戦 civil war」のもとで，憎悪，猜疑心，残酷さが人びとの相互関係の当たり前の状態になっていき，他方，戦争に勝つための権力の集中と，肥大化する政府機構の統制を経験する過程で，もしもボリシェヴィキが権力に収まるなら，彼らの共産主義は色あせて，

ると洞察していた。

ラッセル1920は，20世紀転換期の同時代人として，現在進行形のロシア革命の世界史的運命について書かれた百年前の小著ではあるが，同書にはこの著者らしく，マルクスにも，レーニンにも全く囚われない批判的な目で自由に思索した結果が溢れていて，20世紀末に崩壊したロシア・ソ連社会の史的転回を考えるのに今日でも得るところが多い。

一方，歴史家エルリフマン（1965-）は，旧ソ連崩壊時まだ26歳，歴史文書館に勤務していた。彼の『20世紀の人口損失：便覧』が衝撃的であるのは，旧ソ連構成15か国を含む全世界各国の軍民「人口損失」データを渉猟・編纂し，その結果，二つの全体主義（共産主義とナチズム）を体験したロシア・ソ連においては，二つの世界大戦をふくむ20世紀全体の軍・民戦死戦没総数を，テロル死総数が上回り，それをさらに餓死・流行病死総数が大幅に上回るという世界全体の人口損失推計データ便覧を提示したことである。

『便覧』によれば，ロシア・ソ連の「20世紀の人口損失」規模は，絶対的にも，相対的にも世界最大ではないが（絶対規模では中国が，相対規模＝人口比ではカンボジアが最大），エルリフマンは，この損失により，最大の打撃を被ったのがわが国であると考えられるとし，その所以を，「ロシアの発展の破局的性質」にもとめ，「ロシアは前世紀初頭以来，社会体制の二度の根本的取り換え，二度の国家崩壊，三度の大戦（最初は日露戦争），三度の深刻な飢餓，そのうえ数度にわたる大規模弾圧を体験した。この間，ロシア社会のエリート層が大部分，根絶ないし永久に追放され，残りのものには「新しい人間」の創出にむけ思想的な矯正をほどこされた」[3]，と述べている。

エルリフマンは，自著序文の末尾を，世界初の当『便覧』の編纂という試みが，「人口損失」

ソ連の発展の「破局的性質 catastrophic nature」をテーマに含んでいる。

本稿は，当初想定していなかった補章を加え，エルリフマンの先行研究者の一人，著名な旧ソ連異論派・米国亡命者であるセルゲイ・マクスドフの「ソ連市民の非人間化 Dehumanization」をキーワードとする所説をも取り上げる。

後述のように，エルリフマンのいう「ロシアの発展の破局的性質」とその諸相についての説明には，いささか難解な部分がある。しかるに，本稿執筆中，この難題を打開する糸口として，エルリフマンの『便覧』公刊の少し以前と以後に，マクスドフが，エルリフマンとはまったく別の視角から，極めて注目すべき所説を展開していることを知った。

しかも，「ソ連の人口損失」の先行研究者としてのマクスドフは，旧ソ連異論派（旧ソ連反体制民主派）による　サミズダート（タイプ刷りの回覧誌；厳しい検閲制度下においてタイプ刷りの紙束をただ綴じただけの《自主出版物＝地下出版物》を，同人仲間の範囲内で回覧する《書物》のこと）とタミズダート（国内では出版できないサミズダート本を国外に持ち出し，ロシア語もしくは外国語で海外において出版し，それをソ連国内で受け取り，回覧する刊行物のこと）という，二つの「出版方式」の体現者の一人でもあった。

ちなみにマクスドフの「ソ連の人口損失」研究にかかわる最初期の作品を収めた旧ソ連異論派のサミズダート雑誌『二〇世紀』をモスクワで編集していたのが，異論派兄弟の歴史家ロイ・メドヴェージェフであり，当作品の仏語訳及び英語訳が，それぞれパリとロンドンで公表され，その結果，マクスドフの「人口損失」研究が国際的に知られるようになる，その媒介役を果たしたのが，1973年にソ連市民権を剝奪されて以降，ロンドンを拠点に活動していた科学者ジョレス・メドヴェージェフである。しかも，異論派兄弟の兄ジョレス自身は，マクスドフ論文のキーワード「ソ連市民の非人間化」にかかわる，非常に興味深い独自の所説を提示していた[5)]。

そこで本稿補章の「三，結び」では，マクスドフとジョレスの両所説の対比を試みる。

第一章　ラッセルの古典『ボリシェヴィキの理論と実践』の洞察

一，ロシア革命とマルクス主義に対する態度表明

ラッセルは，20世紀の同時代人として世界史上の英雄的事件＝ロシア革命に対し，以下のように自身の態度を表明している。

・ロシア革命の最重要な側面は，社会主義を実現しようとした試みという側面にある。
・私自身，社会主義は世界に必要であり，また，ロシアの英雄的行為が，将来の社会主義の実現に不可欠な人びとの希望を燃え上がらせたと信じている。
・しかし，モスクワが社会主義樹立を狙う方法は，開拓者の英雄的方法であり，乱暴で危険，

反抗が引き起こす代償を考慮しておらず，この方式で安定した望ましい社会主義が樹立できるとは考えない。

・ボリシェヴィズムの失敗の諸要素は，細部の欠陥よりも，むしろ「性急な哲学」，即ち普通の男女の意見や感情に十分な準備をほどこさないまま新世界の創出を目指そうとする哲学に起因する。

・私が彼らと最も根本的に意見を異にするのは，ボリシェヴィズムが精緻な経典を備える宗教になっており，レーニンも命題の論証にマルクスの文章を持ち出すことがある。自由な探求に対して人間の精神を閉ざし，人間を中世の知的牢獄に放り込んでようやくもっと正しい経済体制が実現できるとすれば，私は代償が大きすぎると思う。短期的には独断的な信念が戦闘の役にたつことは否定できない。・・・現在権力を保持する人びとは，脅威を受けていると感じた時，どのような残酷さ，背信，野蛮さも辞さないものである。[6)]

ここで注目されるのが，ロシア革命の展望に対するラッセルの厳しい見方が，「ボリシェヴィズムがマルクス主義という精緻な経典を備える宗教になっている」ことへの懸念と結び

ついていることにある。

ラッセルが，マルクスの信奉者に広まるマルクス主義の経典化を批判するのは，これが初めてではない。ラッセルは，1895年にドイツ滞在中，マルクス『資本論』を集中的に検討するとともに，ドイツ社会民主党の会議を傍聴したこともあり，これらの研究と視察をふまえ，ラッセル1896において，『資本論』体系における「小農没落理論」とのかかわりで，ドイツ社会民主党における「マルクス主義のドグマ化」をとりあげたことがある[7)]。

二，英国労働党代表団の随員として訪ロ

ラッセルは，1920年の約一か月，英国労働党代表団と共に旅行する条件で入出国を認められ，代表団側も彼の同行を認めた。彼らはロシアの現状や統治方法の実際に最大限の確証が

ペテログラードとモスクワの両首都滞在の終了後，一行は農村地方の視察と農民との接触を希望，ヴォルガ中流域の住民との自由な意見交流が実現した。

一行が訪ロした1920年は，白衛軍と英仏日米干渉軍が撃退され[9]，政権がほぼ安定にむかう一面があったものの，マフノ軍ら「緑軍」や「黒軍」とのうち続く内戦のため，工業生産が激減，戦時共産主義下の農産物の強制徴発により，農民の不満が鬱積しつつあった。翌21年春にはクロンシュタット要塞の水兵が叛乱し，鎮圧されている。

ロシア内戦期（1917-22年）には，赤色テロル（赤軍）と白色テロル（白衛軍）の応酬のほか広範な「緑軍・黒軍」蜂起が重なり，後述（一章）のように，戦闘による戦死戦傷死250万人，テロル死200万人のほか，餓死・パンデミック死600万人の総計1,050万人もの膨大な「人口損失」が生じたとの推計がある[10]。

三，ラッセル小著1920の内戦下にある「革命ロシア」の洞察から

B・ラッセル著『ボリシェヴィキの理論と実践』は，レーニンの新経済政策（ネップ）導入や1921年の大飢饉発生以前，従って1922年創設のソヴィエト社会主義共和国連邦が成立する前の1920年秋に脱稿した「ロシア内戦印象記」ともいうべき作品であるが，以下に抜粋・紹介する「革命ロシア」が当時直面した諸問題を，現在進行形の時制で洞察した印象的なフレーズには，あたかも旧ソ連崩壊をその70年前に示唆していたかのようにも読める事例もあり，興味ぶかい。

本書に独特のラッセルならではの洞察を五点（a～d）について抜粋・紹介しよう。

a）内戦の悪・・・憎悪と猜疑心，残酷さが当たり前の状態になる

・・・資本主義はボリシェヴィキの思い込んでいるほど悪いものではないというのではなく，社会主義は，それがその最善の形態ではなく戦争の結果として生ずる唯一の形態であるというのでは，それほどよくはないという意味である。戦争の悪弊evils，特に内戦civil warの悪弊は確実であり，非常に大きい。そのような社会主義の勝利から如何なる利益が得られるかは疑問である。絶望的な闘いのなかで，文明の遺産は失われ，憎悪，猜疑心，残酷さが人びとの相互関係で当たり前の状態になるかもしれない。戦争に勝つには，敵との生存が必要である」で敵対の集中から，資本主義的な富の集中からも同様な諸

b）レーニンの「マルクス主義の福音にたいする宗教的な信仰」

誰であるかを知らずに彼と会ったら，彼が偉大な人だということを気づかずに終わっただろうと，私は思う。あまりに強く自説にこだわり，偏狭なまでに正統的だという印象を受けた。彼（レーニン）の強さは彼の正直さ，勇気，不動の信念から来ていると，私は想像している。彼の信念は，いわばマルクス主義の福音にたいする宗教的な信仰である。マルクス主義の福音のほうが利己主義的でないという点を別とすれば，この信仰がキリスト教殉教者の天国への願いの役割を果たしているのである。彼は，ディオクレティアヌス帝の迫害のもとで苦しんだ後に勢力を得てから復讐したキリスト教徒と同じく，自由にたいする愛着をほとんどもっていなかった。おそらく自由への愛着は，人間のあらゆる苦しみを治療できる万能薬があると心から信ずる態度とは両立しないのであろう。そうとすれば，私は西欧世界の懐疑的な気質を喜ばざるをえない。私は社会主義者としてロシアへ行った。しかし疑いをもたぬ人びとと接して私自身の疑いは千倍も強くなった。社会主義そのものにたいする疑いではなく，信条を固く抱いてそのために不幸をもたらすのは賢明でないという疑いである[12]。（第一部第Ⅲ章「レーニン，トロツキー，ゴーリキー」から）

ラッセルは，英語の堪能なレーニンと，二人だけで会談している。その際，レーニンは「貧農と富農（クラーク）との対立」，「貧農に対して行っている政府の富農反対の宣伝」について語り，「農民に対する独裁は長期にわたって続けなければならいといわんばかりの口調であった」という[13]。

c）政府の候補者を勝たせるためのソヴィエトの色々な方法

・・・ロシアに行く前，代議制政府の新形態について興味ある実験を見に行くものと想像していた。そうした調査はできず・・・ソヴィエト体制はもう死にかけていた・・・どう工夫しても自由な選挙制度では，都市も農村も共産党に決して過半数を与えはしない。そこで政府の候補者を勝たせる色々な方法が採用された。第一は，投票を挙手で行い，政府に反対投票するものはみな要注意人物となる。第二に，非党員の候補者は印刷物を出せない。印刷作業がみな国の管理下にあるからだ。第三に，非党員は集会で演説できない。会場がみな国有だからである。農村地方は一般に党員がいない・・・それでも非党員を代議員に選んだら，代議員は鉄道パスを入手できず郡・県ソヴィエトには出席不可能だとの主張に誰もが同意した。サラトフの県ソヴィエト集会を見学すると，代議員は都市労働者が農民より圧倒的多数になるよう，代議制が手配されている[14]。（第一部Ⅳ章「共産主義とソヴィエト憲法」から）

この点，ラッセル自身の指摘はないが，「代議員は都市労働者が農民より圧倒的多数になるよう手配されている」のは，1918年制定「ロシア社会主義連邦ソヴィエト共和国憲法」が明記する憲法上の規定に基づくものであった。E・H・カーが紹介するように，最高権力と規定される「全ロシア・ソヴィエト大会」は，投票者二万五千人毎に一人の代議員を基準とする都市ソヴィエトの代表と，人口十二万五千人毎に一人の代議員を基準とする地方（農村）ソヴィエトの代表とから構成されることになっていた。

ソヴィエト権力は，労働者一人が農民五人分の政治的権能を憲法で保障される体制として，即ち，都市による農村支配を保障される体制として出発したのである[15]。

d) 革命の瞬間，民衆受けする標語を掲げるが，それを彼らの目的のために利用する

・・・ボリシェヴィキ理論が合理的であるためには，彼らボリシェヴィキは階級意識のある少数者が起こした革命に少なくとも一時的に多数者を黙従させていけると考えていると想定する必要がある。ロシアの経験に照らしてそういえる。民衆は，平和と土地への欲求から，1917年11月にボリシェヴィキを広範に支持したが，その後，共産主義への愛着を全く示さなかった。

ここでボリシェヴィキ哲学の本質的な論点に至る。革命の瞬間，共産党は，何か民衆受けをする標語を掲げ，共産主義だけでは得られない支持を得る。・・・いったん国家機構を掌握すると，彼らはそれを自分たちの目的のために利用するのである[16]。（第二部Ⅳ章「共産主義とソヴィエト憲法」から）

10月蜂起の翌日，10月26日の第二回全露ソヴィエト大会で提案・採択された「土地布告」と憲法制定会議を例にとれば，ラッセルの指摘通りである。「土地布告案」の根幹はボリシェヴィキの党是でなく，社会革命党（エスエル）機関紙に掲載された，同年5月の第一回全露農民大会の代表に託された242通の「要望書」に沿うものだった。

レーニンは演壇で242通の「要望書」に沿うメモを読み上げた後，こう述べた。

ここで，布告そのものと要望者はエスエル党員が作ったものだ，という声があがってい

の提案を歓迎し，その意味で，10月革命を広範に支持したことになるが，彼らはボリシェヴィキを直接，支持したわけでない。ボリシェヴィキは憲法制定会議の選挙結果に満足せず，周知のように翌年3月，憲法制定会議を解散させた[17]。

e）ボリシェヴィキのもっとも初歩的な失敗の主因は農民敵視

・・・ロシアにおけるもっとも初歩的な失敗は，食料をめぐる失敗である。かつては穀物その他の農産物では厖大な輸出可能な余剰を生み出していた国，非農業人口が全人口の15%でしかない国では，都市に十分な食料を大した困難もなく供給して然るべきである。・・・主要な理由は農民への敵意であり，それはさらに工業の崩壊，強制徴発の政策

によっている。小麦と小麦粉については，農民が自分と家族が必要とする最低限以上に生産したものを，政府がすべて徴発している。代わりにある一定額を地代として」取り立てていたなら，農民の生産意欲を打ち破ることはなかったであろう・・・そうすれば，病気にも対処できたであろうし，全般的な生命力の低下を避けることもできたであろう[18]。（第二部Ⅳ章「ロシア共産主義は何故失敗したのか」から）

ラッセルは，自著をボリシェヴィキへの勧告として公刊したわけでないが，翌年レーニンは，あたかも（o）の指摘を受け容れるがごとくに，ネップ＝新経済政策を導入した

第二章　V・エルリフマン著『20 世紀の人口損失：便覧』が提示する二つの全体主義による人口損失データ群

序　米国＝ウクライナ財団の期待

エルリフマンは日本でも無名でない。Wikipedia の日本語版や英語版が提供する 20 世紀の「両大戦交戦国全体の犠牲者総数の推計一覧」でも，一部データの典拠に，エルリフマンの同書に拠るとの注記がある。例えば，英・仏・独・日の旧植民地帝国が「自国の臣民兵士」として戦時動員したアジア・アフリカ諸国民の戦死者情報を，エルリフマンが隈なく渉猟した世界各国の「人口損失データ」という恩恵に浴しているからだ。

直近では，グーグルに Vadim Erlikhman をインプットすると，米国ウクライナ財団 US-Ukraine Foundation のサイト https://usukraine.org/blog に，2023 年 5 月 8 日付のブログ「ソ連各共和国別の軍民戦没者推計 blog/estimated-losses-for-each -soviet-republic」に，エルリフマン作成という別表①の一覧表を提示し，以下のように概説する。2023 年現在，露ウ戦争を闘うウクライナ側にとり，エルリフマン情報には貴重な価値があるとみえる。

（ロシアの戦勝記念日は 5 月 9 日だが），ウクライナは欧州に加わり 2023 年 5 月 8 日に，[illegible]

自国勝利を主張する一方，ウクライナの役割を公式に否定するが，ウクライナは第二次大戦勝利のために旧ソ連諸国の中で最大の代償を払った。ウクライナは赤軍への重要な貢献国であり，ソ連の産業資源の重要な供給国として，第二次大戦中に最多の死傷者を出した。

別表①　ソ連各共和国別の第２次世界大戦軍民戦死戦没者推計

単位：千人	1940年人口	兵士戦死	民間人犠牲	戦没者合計	人口比(%)
アルメニア	1,320	150	30	180	13.6
アゼルバイジャン	3,270	210	90	300	9.2
ベラルーシ	***9,050***	***620***	***1,670***	***2,290***	***25.3***
エストニア	1,050	30	50	80	7.6
ジョージア	3,610	190	110	300	8.3
カザフ	6,150	310	350	660	10.7
キルギス	1,530	70	50	120	7.8
ラトヴィア	1,890	30	230	260	13.8
リトワニア	2,930	25	350	375	12.8
モルダヴィア	2,470	50	120	170	6.9
ロシア	***110,100***	***6,750***	***7,200***	***13,950***	***12.7***
タジク	1,530	50	70	120	7.8
トルクメン	1,300	70	30	100	7.7
ウズベク	6,550	330	220	550	8.4
ウクライナ	***41,340***	***1,650***	***5,200***	***6,850***	***16.6***
不明	—	165	130	295	—
ソ連合計	***194,090***	***10,700***	***15,900***	***26,600***	***13.7***

資料：ワジム・エルリフマン 2004『20世紀の人口損失便覧』23-35頁。
出典：usukraine.org/blog/estimated-losses-for-each-soviet-republic

考慮すれば，ウクライナ側が，ロシアのプロパガンダに対抗・反撃するうえで，人口比でみて，ソ連合体示最多の戦死戦没者を出していると主張したい心境にあるのは理解できる。そ

の意味で，米国・ウクライナ財団は，旧ソ連のアーカイブ・データに通じた歴史家エルリフマンによる『20世紀の人口損失：便覧』を，高く評価しているのであろう[1)]。そこで，同書の内容そのものの検討に入ろう。

一，エルリフマン著 2004『20世紀の人口損失：便覧』の構成，「損失」の定義

本書の構成概観　　別表②にエルリフマン著 2004 の構成イメージを示しておこう。

別表②　V・エルリフマン著 2004『20 世紀の人口損失便覧』の目次と内容構成の概観

序文	本書の目的と方法	人間的で公平な社会構築，「損失」の全体像を提示
	（人口）損失の定義と種類	人口動態に影響を及ぼす「不自然な死」を対象
	ソ連-ロシアの人口損失の帰結	ロシアの発展の破局的性質，社会主義の実験失敗
第 1 章	旧ソ連各国	戦争，革命，テロル，自然・人為災害等の犠牲を時系列的に記述
第 2 章	欧州各国	同　上
第 3 章	アジア各国	同　上
第 4 章	南北米州各国	同　上
第 5 章	アフリカ各国	同　上
第 6 章	大洋州各国	同　上
付録Ⅰ	主要自然災害	地震，雪崩，台風，洪水，津波，降雨，飢饉，パンデミック
付録Ⅱ	人為的大災害	鉱山，化学・放射線，大火災，ダム，鉄道，海水難，航空機
付録Ⅲ	戦争と紛争	ボーア戦争から，チェチェン，ダゲスタンの紛争まで
付録Ⅳ	世界大戦の犠牲者	一次大戦と二次大戦の全交戦国人口損失の総括的一覧表示
付録Ⅴ	全体主義政権によるテロルの犠牲者	共産主義とナチスによるテロル死全体一覧表示
付録Ⅵ	非業の死を遂げた元首・首脳（大隈重信 4.10.1916，I・ガンジー 31.10.1984 など）	
付録Ⅶ	世界各国の各年人口統計値（1900，1920，1940，1960，1980，2000 年値）	
付録Ⅷ	世界各国の年間人口損失値（1960，1970，1980，1990 年値）	
付録Ⅸ	死因別人口減少	交通・輸送事故，中毒，転落，火災，溺死，自殺，殺人など
付録Ⅹ	2000-2003 年の局地紛争・国境紛争	チェチェン，カラバフなど
文献	第 1～6 章に提示される人口損失データの典拠文献一覧	

[illegible]

20 世紀の回顧と新千年紀の課題と方法　著者によれば，過去一世紀は，世界戦争と局地戦争が極大化，犠牲者に占める民間人が増大。二つの全体主義（共産主義とナチズム）のため残酷なテロルの犠牲者も増大した。技術革新と画期的発明も人間生活をより安全にするには至らず，タイタニック遭難で始まった 20 世紀はチェルノブイリその他の人為的惨事で終わった。生態学的状況の悪化の結果，近未来の気候変動が，人類ばかりか，地球上の生命を持続不能にする恐れがある。そうであるなら，吾々は新千年紀に，戦争，集団テロル，天賦資源浪費など，前世紀から続く情況を続けるのかどうか，一緒に決断せねばならないと問いかけ，この点，人類が 20 世紀に体験した犠牲全体を知ることが不可欠である，と述べ[2]，これが，

低下と死亡率増加による）に分類され，後者は一般的な人口減少カテゴリーを形成し，人口動態を特徴付けるため広く使用される。

このうち『便覧』の対象は，前者の直接損失（死者数）のみであるが，著者は「20世紀の全紛争には，厳密な意味では（人口）損失と分類できない膨大な数の〈政治犯・難民・移民〉の出現が伴うが，本書ではこれら（人口）損失は特定国の状況（例えば現ロシアの状況）に大きな影響を与えると考えるとも述べる[3]。

二，『便覧』著者の希望と懸念

旧ソ連の損失推計結果：「ロシアの苦境」認識と著者の希望　本『便覧』は，《人類が20世紀に体験した損失の全体像を知る》ために，世界155か国を網羅した初の《20世紀全体の世界軍民「人口損失」データ集》を上梓したものであるが，著者自身は，就中《本データ集＝便覧のメッセージ》について，二つの全体主義＝〈共産主義とナチズム〉の双方を体験した旧ソ連構成15か国の人びとに受けとめてもらいたかった。

したがって，別表②の概要イメージに示したように，『便覧』の叙述本文の総括部分が，「ソ連-ロシアの人口損失の帰結」となっており，同僚研究者と読者に向けたメッセージが集約的に語られる。以下に五つのメッセージを紹介しよう（意訳を含む）。

a）ロシアの発展の破局的性質 catastrophic nature

今世紀のわが国の人口損失規模は絶対的にも相対的にも最大ではない。しかし，最大の打撃を被ったのがわが国である。理由はロシアの発展の破局的性質 катастрофический характер; catastrophic nature にある。ロシアは20世紀初頭以来，社会体制の二度の根本的な転換，二度の国家破綻，三度の世界大戦（最初は日露戦争），三度の大飢饉，そのうえ幾度も大規模弾圧を体験した[4]。

b）エリートは絶滅され，残るものは「新しい人間」の創出にむけ思想的に矯正された

この間，ロシア社会のエリート層が大部分，絶滅するか，永久に流刑とされ，残りの者には「新しい人間」の創出にむけた思想的な矯正（イデオロギー的洗脳）が施されてきた。

その結果，ロシア国民の遺伝子プールが修復不能なほどの打撃を受け，往年のロシア人が消滅するか，民族の一体性を亡くす脅威に晒される否定的現象の表出がつくられた[5]。

c）ソ連時代に「人口損失」研究は禁止され，外国人か，異論派しか議論しなかった

この苦境から抜け出す試みの中で「社会主義の実験」と「ソ連の人口激減」との関係に

人口喪失のテーマ」に関する論議は，ご法度とされ，外国人と地下出版（サミズダート）の著者しか議論してこなかった[6]。

d）わが国「人口損失」の時期区分は三期と6亜期に分ける必要がある（別表③参照）

わが国の「人口損失」の時期区分は三期に分け，うち第二期（1917-1953年）を，6亜期に分ける必要がある。1917年12月に全ロシア非常委員会（チェーカー）が設立され，組織化されたテロルが始まった。わが国の人口損失のピーク（図1参照）は三期あり，第二期のなかの第1亜期＝内戦期（1917-1922年），第2亜期＝農業集団化期（1930-1934年），第5亜期＝第二次大戦期（1941-1945年）の3亜期に相当する。第三のピークである第5亜期の損失推定値の最初のものは1946年にスターリンが発表した700万人だった。2番目の推定値は1961年にフルシチョフが発表した2,000万人以上というもので，ゴルバチョフ末期の1989-90年にやっと，特設の国家委員会が，民間人犠牲者1,800万人を含む2,660万人という，ほぼ現実的な推計値を導き出した。

第三期のスターリン没後（1953-2000年），人口の直接損失もテロルも減ったが，ソ連の崩壊後，チェチェンやナゴルノの大規模な民族紛争の頻発と移民急増が注目される[7]。

別表③　エルリフマンによる20世紀ロシア/ソ連の人口損失の時期区分

第Ⅰ期	1901-1917年
	第1次ロシア革命（1905-1906年） 第1次大戦期（1914-1917年）
第Ⅱ期	1917-1953年
第1亜期	内戦期・大飢饉期（1917年10月-1922年10月）　死亡率の第一ピーク
第2亜期	内戦期以後（1922年11月-1929年12月） 比較的に見て拘禁者・投獄者に対する大規模なテロル死がなかった
第3亜期	農業集団化期・大飢饉（1930年1月-1934年11月）　死亡率の第二ピーク
第4亜期	大量弾圧期・局地紛争（1934年12月-1941年6月） 収容所網の致死率の高い強制労働システムへの転換期である
第5亜期	第2次大戦期（1941年6月-1945年8月）　死亡率の第三ピーク 戦死戦傷死・民間人戦没のほかナチスによるテロル犠牲者が加わる
第6亜期	戦後期（1945年8月-1953年3月スターリン没） 強制収容所がさらに拡大したが致死率は低下した
第Ⅲ期	1953-2000年
第1亜期	スターリン歿後期からソ連崩壊期まで（1953年3月-1991年8月） 人口損失の要因にアフガン戦争とチェルノブイリ惨事が含まれる

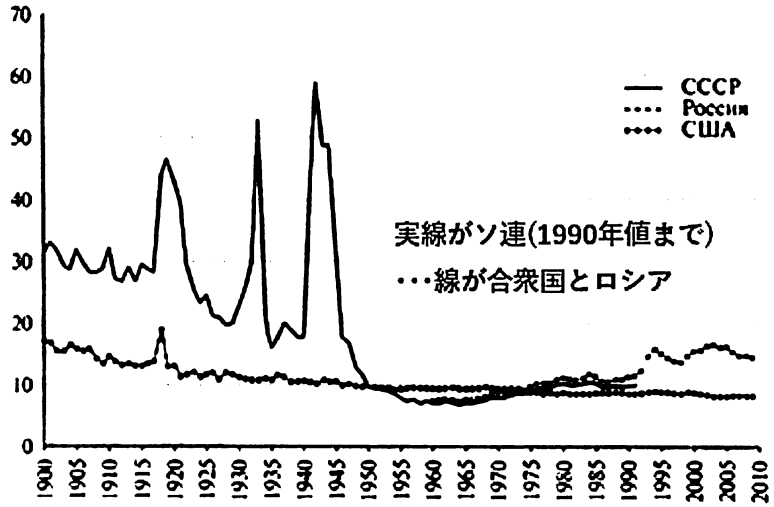

図１　20 世紀のソ連と合衆国の死亡率の動向（千分比）

出典：マクスドフ 2019，308 頁。

e)『便覧』が，人間的かつ公正な社会を構築したいとの希望を鼓舞すると信じたい

当便覧を作成するという最初の体験が，「不自然な死による人口損失」の研究分野のみならず，前世紀の痛ましい経験を乗り越え，より人間的で，より公正なる社会を構築したいという人びとの希望をも鼓舞するものになると信じたい[8)]。

三，『便覧』が綴るデータ群の基調を鳥瞰図的に一覧表示する試み（表 1-表 5）

前述のように本書は基本的に「20 世紀の人口損失」についての世界 155 か国のデータ集であり，「付録Ⅳ」と「付録Ⅴ」に掲載される「両大戦の戦死戦没死」と「二つの全体主義によるテロル死」に関する鳥瞰的な一覧表示のエクセル表があるほかは，基本的に，国ごと，事件ごとに，時系列的な「人口損失」データ（死者数）を羅列するだけのスタイルになっている。

そこで本節では，「付録Ⅳ」と「付録Ⅴ」が提示する「両大戦の戦死戦没死」と「二つの全

そこで，これらが表示する項目と係数のうち，主要関係国とその主要項目に限定・抜粋し，『便覧』の意図をコンパクトに一覧表示したのが表1及び表2である。

表２　全体主義（共産主義とナチズム）によるテロル犠牲者と人口比（単位：万人/人口は百万人）

共産主義（1917-99 年）	処刑	投獄	獄死	追放	死者	ゲリラ	死者計 a	人口 c	a/c %
ソ連（1917-87 年）	**270**	**3,000**	**480**	**750**	**170**	**85**	**1,005**	**266**	**3.8**
中国（1949-99 年）	**380**	**14,400**	**2,500**	**—**	**—**	**—**	**2,880**	**911**	**3.2**
カンボジア（1975-79 年）	**90**	**—**	**—**	**370**	**130**	**5**	**225**	**6.4**	**35.2**
北朝鮮（1945-99 年）	**50**	**300**	**70**	**—**	**—**	**—**	**120**	**20**	**6.0**
ベトナム（1946-92 年）	20	400	40	—	—	—	60	54	1.1
ユーゴスラヴィア（1944-88 年）	32	22	1.5	—	—	1.5	35	22	1.6
東独（1945-89 年）	21	25	7.5	7	—	—	9.6	17	0.6
その他含む合計	840	18,385	3,110	1,155	300	100	4,349	4,430	1.0

ナチズム（1933-45 年）	処刑	投獄	獄死	連行	死者	—	死者計 b	人口 d	b/d %
ソ連	**740**	**120**	**60**	**520**	**170**	**—**	**970**	**193**	**5.0**
ポーランド	**170**	**460**	**330**	**240**	**17**	**—**	**517**	**32**	**16.4**
ユーゴスラヴィア	**65**	**55**	**—**	**42**	**5**	**—**	**70**	**16**	**4.5**
ドイツ	28	180	37	—	—	—	55	70	0.8
フランス	5.3	47	23	262	1	—	30	42	0.7
ハンガリー	3	39	22	11	1	—	26	9.3	2.8
チェコスロヴァキア	2	36	24	55	0.3	—	26	15	1.7
その他含む合計	1,065	1,171	611	1,750	197	—	1,873	2,295	0.8

ズムのテロル」のうち特に犠牲者の多い諸国の一部係数を抜粋・編集した。
右端「人口比」の人口は，上段 c が 1980 年人口，下段 d が 1940 年人口。
注１：「追放」とは，富農経営や特定民族を僻地や極北，遠隔地に強制退去させること。

表3　20世紀の主要交戦諸国の人口損失規模と損失要因の内訳対照（単位：万人/人口は百万人）

		ロシア・ソ連	中国	印度	日本	独国	伊国	仏国	英国	米国	全世界
世界各国の1980年人口（a）		289	981	689	117	76	56	54	56	228	4,430
人口損失の実数	1901-1945年小計	**6,167**	2,516	1,536	349	**906**	143	270	132	113	16,212
	1946-2000年小計	231	**6,325**	263	21	45	1.9	11	0.6	28.5	10,828
	1901-2000年損失合計（b）	**6,397**	**8,841**	1,799	370	951	144	280	132	141	27,090
	軍事作戦による	1,675	699	25.7	317	702	98	204	114	64	5,903
	テロル死による	1,831	3,505	60	7.8	141	10.9	32	0	0	8,148
	餓死・流行病による	2,850	4,306	1,644	27.7	109	14.8	45	18.0	77	12,494
	自然災害による	21.0	295	71	16.9	n.a.	20.0	n.a.	n.a.	n.a.	544
内訳%	1901-2000年損失合計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
	軍事作戦による	***26.2***	***7.9***	1.4	85.8	***73.7***	67.7	72.6	86.5	45.5	21.8
	テロル死による	***28.6***	***39.6***	3.3	2.1	***14.8***	7.5	11.3	0.0	0.0	30.1
	餓死・流行病による	***44.6***	***48.7***	91.4	7.5	***11.4***	10.2	16.1	13.6	54.5	46.1
	自然災害による	0.3	3.3	3.9	4.6	—	**13.9**	—	—	—	2.0
（※参考比率％＝b/a）		22.2	9.0	2.6	3.2	12.5	2.6	5.2	2.3	0.6	6.1

[illegible]

集したもの。
注1：「自然災害」は，ハリケーン，地震，洪水，雪崩・地滑り，火事，スモッグなど。
注2：米，英，仏，日，独の「餓死・流行病死」欄の殆どは1918年流行の「スペイン風邪犠牲者」の係数。
注3：米国の軍事作戦による損失係数にはベトナム戦争に従軍・戦没した5.8万人を含めてある。
出典：Эрлихман（2004），c.23, 39-40, 42-43, 4647, 52-53, 62-63, 69-71, 107-108, 112, 144-148.

表3の作成方式を，世界主要9カ国でなく，現在の露ウ戦争の直接当事国に適用すれば，ロシア・ウクライナ・ベラルーシ三国のそれぞれの，前世紀における痛ましい記録の異同の特徴を再現できる。表4はその試みである。

表4の試みは，米国-ウクライナ財団が表示した別表①の拡大版にも応用できる。表5はこの別表①の拡充版となる。

ここで立ち入った検討はできないが，表5においても，1940年人口値に占める20世紀全

体の人口損失の比率　ここでもウクライナの比率がロシアを大幅に上回っていることと，そ

れとともに，トルクメニスタン，アルメニア，カザフスタンの人口損失率がいずれも40％で，しかもウクライナ以上に高いことに注目し，この点確認しておきたい。

c）表6：20世紀ロシア・ソ連の人口損失データの時系列的推移を鳥瞰する試み

著者は前世紀の人口損失でロシア・ソ連こそ最大の打撃を被ったといい，その例証として，20世紀ロシアの発展には「社会主義の実験」に伴う「破局的性質」があり，この間エリートの多くが撲滅されるか流刑に遭い，残る者に「新しい人間」の創出のため思想矯正が施された結果，ロシアが被った打撃は，ロシア国民の遺伝子プールが修復しがたい破壊を被ったとするほか，わが国は「損失」の定義では厳密には「人口損失」と言えない「政治犯・難民・移民」によっても重大な影響を受けつつあると示唆しているかにみえる[9)]。

表6は，著者のこれらの指摘を念頭に，二度の体制転換，三度の世界大戦，三度の大飢饉，数度の大規模弾圧・組織的テロル，「集団化」と「工業化」の社会実験が，どのように進められてきたかを，エルリフマンが編纂したデータ群に語ってもらうという意図のもとに時系列

失」とはいえない，疎開者・難民・流刑者・投獄者・拘禁者・出国者・移民などの係数も含めてある。また，ナチスドイツ占領下とドイツ本国に拉致・連行された捕虜とソ連民間人の被拘留者と犠牲者の係数も表示してある。

ただし表6は，別表③で示された時期区分一覧とは照応しない部分もある。

表6　20世紀ロシア・ソ連の戦争・内戦・テロル・飢餓による人口損失の時系列的概観　（単位：万人）

	ロシア・ソ連合計（該当者）	死者	（内訳）ロシア	ウクライナ
日露戦争（1904-05年）		4.4	3.2	0.8
第一次ロシア革命（1905-07年）		5.3	4.1	0.7
餓　死（1908-12年）		16		
移　民（1901-14年）		950		
第一次世界大戦期（1914-17年）		307	207	58
兵士戦死・傷病死		180	122	45
兵士の捕虜と獄死	345	19		
民間人の疎開者数と戦没死	750	107	85	14
ロシア内戦期（1917-22年）		1,050	540	250
戦死・戦傷死		250	n.a	90
テロル死		200		
餓死・流行病死		600	260	160
※大飢饉（1921年）		500	500	n.a.
移　民		200		
移民（ネップ期；1922-26年）		50		
内戦後テロル（1922-34年）拘禁者	1,050	120		
農業集団化期（1930-33年）		800	160	520
富農撲滅（経営剥奪）	950	95		
極北・僻地・遠隔地への追放	250			
大飢饉（1932-33年）		700	n.a.	500

（総括表）

20世紀ロシア・ソ連の人口損失		
「不自然な死」の総数（a）		6,430
軍・民の戦死戦災死		1,960
テロル死		2,060
飢餓・流行病死		2,600
自然災害・大災害		30
移民による人口喪失（b）		720
人口喪失の総計（a＋b）		7,150

（別掲）ロシア・ソ連国内のテロル死

	（該当者）	死者
内戦期以前のテロル死		3.7
1905-07年		2.7
1908-17年		1.0
内戦期と内戦後のテロル死		
下記①～⑥の小計		1,030
収容所等拘禁と獄死	2,000	550
追放者と死亡	750	175
①内戦期（1917-22年）		200
赤色テロル		120
白色テロル		30

[illegible]

れている場合，米国-ウクライナ財団の別表①に倣い，双方を示してある。

ところが，当然ながら，「残る者に思想矯正が施された（思想的に洗脳された）」，あるいは「[illegible]

[illegible]

エルリフマンのいう「新いい人間」は，後述のジノヴィエフらの「ホモソ連人」等を念頭に置いていると察しがつくが，「ロシア国民の遺伝子プールの破壊」の含意を想定することは

国を養う農民が，餓死か，それとも国家権力への絶対的な服従か，という過酷な選択肢に直面した。第二次内戦である。この内戦――貧者 vs 富裕者，都市 vs 農村，国家 vs 農村住民の戦争――では，数百万人もの人びとが落命した。ソ連のマスコミは，この常民文化的＝農耕的大変動 cultural upheaval を農業集団化と呼んだ。公式プロパガンダでは，このキャンペーンは，最効率に営農される社会主義農場の新規創設による，農業生産性の飛躍的な向上が目的であると宣言した。実際には，国家は農産物の生産・流通を完全に管理しようとした。この目的の達成には，国家が農民の生殺与奪の権利を握る必要があった。この内戦は 1931～1933 年に悲劇的な飢餓で最高潮に達した。餓死の恐怖に直面した農民は降伏し，独裁政府の慈悲に身を委ねた。しかし政府は容赦しなかった[2)]。

エルリフマンは，大戦・内戦・大量弾圧＝テロルにより，エリートが撲滅さるか，流刑になり，残りのものが「新しい人間」の形成にむけ思想矯正された結果，ロシア国民の遺伝子プールが修復不能なほど破壊されたのではないか，と問いかけていた。マクスドフは，エルリフマンのいう「エリートの撲滅・流刑・思想矯正」の残酷さに異議を唱えている訳でない。

着眼すべきは，マクスドフが焦点をあてるのが，ロシアのエリートではなく，圧倒的な農民国，ロシアの凍土おおいかぶさる農民，農村いかぶさる住民，農民大衆であることが

会的・経済的な重層構造の構築を完了したばかりか，いくつもの特定条件を備えた新しい人間 a new person を創造した。近年，ソヴォク sovok/совок（現地の呼称）とマンクルト mankurt/манкурт（キルギス人作家チンギス・アイトマートフの造語）なる用語が発明された。この種の個人は受動的である。当局が発する最も不条理な指示さえ従順に実行し，最低賃金でも喜んで働くと思いきや全く働かず，自分の仕事を愛さず評価もせず，自身への確信がなく，未知への恐怖のなかに生き，可能な限り法律を破り，窃盗をして財産を再分配する自然形態とみなし，おまけに自尊心がなかった。人間性や思いやり，家族愛や隣人愛などの倫理的美徳が，恐怖や飢餓のために弱められるか抑えられるかした。同時に，この人物は，それが正しいと信じて公式の活動に参加するが，ソ連のプロパガンダのスローガンと実際の状態との食い違い，例えば，対立候補者のない単一候補者への全会一致投票を，「選挙」と称することの食い違いなどに全く気づかない・・・。オーウェルがこうした統合失調症による意識の分岐を「二重思考」と呼ぶのは正しい[4)]。

最後の「対立候補のない選挙」や，オーウェルの「二重思考」を喚起させるレトリックは

あたかも，露ウ戦争３年目に迎えるプーチンの大統領「選挙」に向けられた観さえある。

ここで「ソヴォク」は，「ソヴィエト」に由来するスラングで，旧ソ連東欧諸国の社会主義政権が推進したイデオロギーをもつ人びとへの皮肉で批判的な含意があり，類似した用語に「ホモ・ソヴィエティカス Homo Sovieticus」がある。

身の勤勉さにかかっているとの信念など，農民の生存にかかわるこれらの核心原則を破壊した」のが，第一次世界大戦期の1千5百万農民の武装と食糧危機に触発された「1917年ボリシェヴィキ革命」ではなく，ほかでもない「集団化」，就中，集団化の第Ⅳ段階における飢餓の深化・進行であったとする，マクスドフ2008の分析視角：「農民の降伏＝党の農村に対する勝利：集団化第Ⅳ段階説」である。

マクスドフは「農民の生存にかかわるこれらの核心原則を破壊したのが，第一次世界大戦

20世紀初頭のロシア帝国の農村住民の慣習や倫理規範は，現代の概念とはかけ離れていた。1906年までは，家父長制の家族生活，農奴制の困難な遺産，農村共同体への依存により，大半の農民は土地売買も都市部への移動も許可されず，農場に留まっていた。第一次世界大戦は，1千5百万人の農民を武装させた。ボリシェヴィキ革命はこれら武装農民を農村に帰還させ，彼らの帰還には地主貴族の絶滅，富農＝クラークの剥奪，家父長制家族の破壊が伴った。ついには，「兄弟殺し」とも言うべき無慈悲な内戦が勃発した（Finally, there was the ruthless civil war, when brothers took up arms against brothers.）。

以上の天変地異はすべて，農村生活の基盤と住民の宗教的伝統を破壊したものの，伝統的な農民生活の重要な基盤そのものを揺るがすことはなかった。農民の土地への愛，私有

の資産を売却する権利をもち，売却益の25％を貧農支援基金に移す義務をも負うこととなる[9]。

第Ⅱ段階；階級としてのクラーク清算 liquidate the kulaks as a class 作戦期

これは農村人口のうち最も活動的で有能な人びとを農村から意図的に排除することを意味する。富農＝クラークの第一範疇とされた数万人の農民が逮捕され，略式処刑ないし懲役刑が言い渡された。全体的に1928～1931年にウクライナだけで30～40万世帯（150～200万人）が資産剥奪か，裁判所により資産差し押さえとされ，うち6.5～8万世帯（30～40万人）が極北へと流刑になった。極北に追放されないクラークは資産没収のうえ，コルホーズ（集団農場）加入を禁止された[10]。

第Ⅲ段階；集団農場の組織化 the “organization” of collective farms 期

農民から耕地，馬，農機具，家畜の大部分を没収し（共有化），農民を労働者へと転換する

彼らは一切のイニシアティヴを奪われ，当局の指示を実行するだけの労働者となる。農民が自分の収穫物を消費する農民生活の特権もまた消滅した。帝政期の農奴よりはるかに過酷な状況は，農村生活の全体系を浸食し，集団農場の組織網構築というソ連国家の残忍な措置は，

農民が全く無防備・無力であると知らしめた。党員と共青同盟員が拳銃で武装，彼らが党・行政機構，法廷，国家保安部隊OGPU，赤軍の支援を受け，積極的に抵抗する試みを容赦なく抑圧した。ただし農民が当局の専横から自衛する最後の手段が残っていた。一生懸命働くのを拒む消極的抵抗である。消極的抵抗のなかには，播種時や収穫時に作業を怠る（穀物を持ち去る窃盗）行為も含まれていた[11]。

第Ⅳ段階；「働かざる者食うべからず」の文字通りの実現期＝消極的抵抗の鎮圧期

当局は1932～33年大飢餓の助けを借りてのみ，非常に危険な消極的な抵抗を鎮圧した。

これが集団化の最も悲劇的な第Ⅳ段階であり，この段階で，マルクス主義が掲げる「働かざる者食うべからず“He who does not work shall not eat.”」の標語が文字通り実施された。

消極的抵抗は，大飢饉のなかで農民とその家族が生き残るための純然たる生存闘争を意味

マクスドフが，消極的抵抗という「この生存競争で農民は人間としての多くの資質を失うという代価を払った」と結論づけたその重要な判断材料のひとつがソローキン 1975 である。

ソローキン 1975 の原著は，国外追放前の 1919-21 年大飢饉期に母国語で書いたものだが，同書は，「飢餓は人間心理の全体，特に知的機能と心理的機能に影響を与える。飢えた人の精

ようになり，精神障害が増加，人格が破壊され，人生から遊離してしまう」と考察していた[13)]。

三，結び　異論派ジョレス・メドヴェージェフの「旧ソ連のアキレス腱」認識との対比

別稿を準備中の 2022 年 2 月，ロシア軍のウクライナ侵攻がはじまった。

別稿とは異論派ジョレス・メドヴェージェフ追悼論文のことである。

2018 年 11 月，ロンドンのジョレスが満 93 歳で永眠した。モスクワのロイは 98 歳のいまも健在と聞いている。

が，西シベリアの原油産出基地が老朽化しつつある。こうして現在，石油危機後の原油価格

暴落とその後の低下傾向が続く中で，ソ連経済の国庫破綻がいつ生じてもおかしくない[16]。

ジョレスによれば，旧ソ連は集団化による「クラーク＝富農の撲滅」を通じて，大地に根差す，農民共同体と農民経営（日本流にいえば「ムラ」と「イエ」）の維持・存続に不可欠な大地に対する愛情と，向上心と勤勉性を破壊してしまった。クラークとは「退廃ブルジョア」でなく，創意と工夫に富む勤勉な家族労働経営としての成功者であり，中農層・下層農の誰

もがそうなりたい「富裕な勤労家族農業経営者」であった。

そこで，ジョレスを札幌に招き，国際セミナーを開くという企画が持ちあがった。

日したジョレスは演題「農業の掟と工業の原理＝20世紀の教訓」のなかでこう述べた。

フ兄弟の「当事者能力を失った農民の受動性」とはどこがどう違うのだろうか。

双方の所見は明らかに異なる。しかし，対立するものではない。

マクスドフは，異論派メドヴェージェフ双生児それぞれの消息と所説を熟知している。

マクスドフが1989年に『ソ連の人口損失』を公刊した際，出版を請け負ったのが，やはり往年のソ連異論派の同僚，米国に亡命したワレリー・チャリッゼである。

ジョレスとチャリッゼは，旧ソ連の内外に切り離されている異論派が相互に連絡をとりあう際の，結び目のひとつに位置していた。

そして，チャリッゼ出版こそ，ソ連国内で自著を出版できない異論派が，海外で露文原著を公刊してくれる，サミズダート samizdat（ソ連国内での地下出版＝自主出版）ではない，タミズダート tamizdat（タムは外地）の，頼りがいのある異論派系出版社であった。

マクスドフは，メドヴェージェフ兄弟1975とジョレス1987の所説にも通じている。

マクスドフ2001/2008は，メドヴェージェフ兄弟がカヴァーしていない，集団化の結果としての「組織された飢餓」がもたらしたボリシェヴィキ権力の「農村に対する勝利」の内実を「人口損失」研究の経験を活かし，ソローキンに学び，実証的に考察した。

本稿はマクスドフの結論的な所説を以下のように理解する。

a）集団化の結果としての1931-1933年の「組織された飢餓」の最終段階において，集団化と工業化に不可欠な「新しい人間 a new person」が創造された。

b）しかし，創造された「新しい人間」像は，「餓死の恐怖に直面した農民が降伏し，独裁政府の慈悲に身を委ねた」ことの所産でもある。

c）「受動的」で「従順」な人物は，集団化と工業化に不可欠な人材ではあったが，むしろ，やがて「ソ連を崩壊させる根本原因」となり，「新生ロシアもこの苦境を克服する展望を見出していない」。

以上のうち，a)とb)が，マクスドフ2001/2008の積極的な貢献であろう。

ロイもジョレスも，マクスドフの『人口損失』研究のよき理解者であった。

筆者は二年前に，スターリン晩年期（1948〜51 年）に，亡命ロシア人研究者ナウム・ヤスニーや米国外交官ジョージ・ケナンを含む直接の論客七名と，影の当事者である米国農務省（日本農地改革）顧問ウォルフ・ラデジンスキーがかかわった誌上論争，「ソ連は農業がアキレス腱」論争の顛末を紹介した佐々木 2022 を，本誌『札幌学院大学経済論種』17 号に寄稿，所属学会の年次大会分科会でも紹介・報告した[19]。そして，この国際的な「アキレス腱」論争が，存在した事実については，一定の理解が得られたものと考えている。

結びにあたり，ジョレスとマクスドフの両者の対比だけでなく，露ウ戦争の背景と今後の展望にかかわる「歴史の記憶」「歴史認識」の共通性についても，ひとこと確認しておこう。

マクスドフも以前から『ハーヴァード・ウクライナ研究』誌の寄稿者として知られているが，同誌寄稿者のなかには，R・コンクケスト 1986『悲しみの収穫』が提示したような，1930 年代のロシア南部の大飢饉を，スターリンによる，ウクライナ民族に対するジェノサイドの結果であるとみなす論客が少なくないとみえる。

この流れのなか，Harvard Ukrainian Studies 誌上で A・グラディオッチ 2004-2005 が，マクスドフとジョレスを名指して，「彼らの著作（マクスドフ 1989 とメドヴェージェフ 1987）は，1930 年代のソ連圏の大飢饉の考察としては優れているが，この大飢饉が，スターリンによるウクライナ民族のジェノサイドであることを等閑視するのは誤りである」旨，批判した。

前述のように，マクスドフは，集団化と大飢饉に直面した「ソヴィエト市民・ソヴィエト農民」の降伏，受動化，勤勉性の喪失を問題にしてきた。ウクライナ生まれの異論派マクスドフは，エルリフマンの先行研究者として，邦語文献『ソヴィエト反体制』掲載論文に示されるように，ソ連出国以前の 1970 年代から，「ソ連邦の人口損失」の歴史的特性の解明を進めてきたのである。

ジョレスは，「ソ連・東欧社会主義諸国」の農民と労働者が，専ら上からの指令により管理される，受け身の存在となり，環境破壊もこのことを抜きにできないことを問題とした。国外追放されたジョレスは 1980 年，西側記者から「往年の穀物輸出国ロシアは何故，世界最大の輸入国に転落したか？」と問われた。ジョレス 1987『ソヴィエト農業』は，耕種と畜産を結合する農耕文化を共有する，欧米諸国民に，勤勉な小農家族経営を根絶したソ連農業の失敗を広く理解してもらう試みでもある。

注　記

第1章

1．Russell, Bertrand 1920, *The Practice and Theory of Bolshevism*, Allen & Unwin; 河合秀和訳 1990『ロシア共催産主義』みすず書房。

2．Эрлихман, Вадим 2004, *Потери народонаселения в XX веке: справочник,* Русская панорама,（邦訳なし）

3．Там же. с. 9.

4．Там же. с. 15.

5．S. マクスドフ（本名アレクサンドル・バビョニシェフ）は，ソ連のアフガニスタン侵攻直後に，外国人記者との接触を断つため内陸都市ゴーリキーに隔離・追放されたアンドレイ・サハロフ（ノーベル平和賞受賞者・人権擁護活動家）を支援する活動を展開した廉で KGB に拘束され，1980年，米国への出国を余儀なくされた著名な異論派活動家でもあった。マクスドフの近著に Максудов, Сергей 2019, *Победа над деревней: демографические потери коллективизации*（仮訳「農村に対する勝利；集団化による人口損失」）がある。筆者は異論派兄弟の兄ジョレス・メドヴェージェフの著書 Medvedev, Zhores1987, *Soviet Agriculture*, Norton の邦訳者である。

6．Russell 1920, p.5-9, 邦訳 5-8 頁。

7．ラッセル 1896（ロンドン大学 LSE 経済学・政治学学院の全六回講義録）は第一講でこう述べる。「資本集中の法則はマルクスの業績中，もっとも独創的な部分であり，彼の全体系にとって本質的に重要な点である。工業に適用した場合には，それは正しく，かつ重要である。しかし向こう見ずの一般化といういつもの性癖のために，彼はその法則を普遍的に正しいと想定し，この生産分野を個別に検討しなかった。」「農作業の季節的変化や，土壌特性の地域的差異を考慮すれば農業には小規模経営に利点もある。」「自由競争は必然的に資本集中の継続的増加をもたらすという理論は工業についてだけある程度正しい。」「社会主義――必然的宿命論の理論，また人がそれを促進にようと妨害しようと真実であることが判っている知識の体系としての――は，かつての自由放任の福音と同じく批判に耐えられない。けれども，集団主義国家の可能性，あるいはそれが望ましいかどうかについて独断的に否定するのも，同じように実証不可能なことであり，この判断は個々の事例の詳細な考察に委ねられなければならない。」「ある意味で

マルクスは，ドイツの偉大な体系創出者たちの中の最後の人だった。彼がわれわれの想像力に強く働きかけ，あれほどに熱烈な弟子たちを得たのは，もっぱら彼の体系によるものであった。しかし，まさにその体系によって，彼は農業についての誤りのような大きな誤りに陥り，彼の信奉者たちは工業プロレタ

第六講で概略こう述べる。「英国政治の機会便乗的な伝統に慣れた者には，さして難題でなくても，教条的なドイツ人にとっては，政治的成功よりも論理が優先する。各部分が互いに矛盾する綱領は許し難いのだ。さてドイツの主たる耕作者は，自小作農か，伝統的な封建領主支配下の僕卑らであるがすべての生産部門で大企業が小企業にとって代わるというのが，マルクスの基本原理である。マルクスの信奉

しかし，党の公式機関紙は中立の立場を維持したものの，大部分の新聞が，悲観的な自由放任主義を擁護しない，全体的に親農民的・農民保護的な草案の精神に対し，反対の論調を示した。

この見方を，一層平明に表明したのがカウツキーであり，「農民の絶望的状態は一時的なものでない。資本制的生産の必然から生じており，社会の社会主義的な形態転換によって始めて救済できることを呈示せねばならない」と発言した。この批判的な見地は，「都市でも農村でも，すべて小資産の没落を指し示す」というマルクス主義のドグマ Marxian dogma に立脚している。

敢えて予言すれば，党は，農業綱領を拒否することにより，当面，自小作農を味方につける合理的な見通しをすべて失った。

以上の「第一講」「第六稿」の出所は Russell 1896, pp.38-40, 144-160；邦訳 43-45, 141-156 頁。第六稿論

旱魃常襲地帯のひとつヴォルガ流域における1920〜21年大飢饉は夙に著名だが，コンドラーシンによれば，ヴォルガ流域では1917農業年の凶作のため，1918年春からボリシェヴィキ政府の食糧独裁・穀物強制徴発による農民の窮迫した食糧事情と革命政権に対する反抗が広がっていたという。ラッセルは現地で自由な意見交換をした住民から現在進行形の「飢餓」について聴いていた可能性もある。コンドラーシン2001, 63-68。

20. レーニンの神聖化，レーニン廟の設営については下斗米2017第5章「革命権力と「神」，そして「崇拝」」を参照されたい。
21. スターリンよく知るフルシチョフによれば，「スターリンにとって農民は人間の屑だったFor Stalin, peasants were scums」と言い，「彼は農民や農民の仕事に敬意を払っていなかった。農民に生産させる唯一の方法は彼らに圧力をかけることだった」「農場では士気も風紀もどん底に落ちた」「彼らは自宅付属地に僅かばかりの野菜をつくり，自分自身を支えどうにか生きていくほかなかった」と語る。Khruschev 1974, p.132邦訳125頁。
22. Russell 1949（第二版），p.5. 邦訳3頁。初版は1920年のラッセル帰国直後に訪ロした当時の秘書が書いた第4章「芸術と教育」を含んでいた。1949年再販ではラッセル自身が筆者ではないこの章を除いた。もう一点として，新しい用語法にならい，間違った印象を与えないため，多くの箇所で「共産主義」の用語を「社会主義」に差し替えたという。河合訳には初版第4章は含まれていない。

1．ただし，厳密にいうなら，人口比でみて第二次大戦において犠牲者比率がもっとも高かったのはベラルーシである。
2．Эрлихман 2004, с.5-6.
3．Там же. с.7-8.
4．Там же. с.9.
5．Там же. с.9.
6．Там же. с.9. ソ連国内で禁止された「人口損失」研究を，国内で進め，その成果を地下出版＝自主出版を通じて公表してきたソ連異論派について，エルリフマンの念頭にあるのが，彼の先行研究者でもあるセルゲイ・マクスドフである。
7．Там же. с.15.
8．Там же. с.15.
9．Там же. с.7.

補章

1．セルゲイ・マクスドフの2017刊露文著『非自然死：1918-1953年ソ連の人口損失』に，同著が所収する論稿「20世紀前半のソ連人口損失動態」の初出稿が，1970年代に異論派ロイ・メドヴェージェフが編集する露文サミズダート誌『20世紀』に掲載された作品であり，同露文誌がロイの双子兄ジョレス・メドヴェージェフによりロンドンで英文誌Samizdat Registerとして刊行され，さらに当英文誌に掲載されたマクスドフ英文論文が，仏語誌『人口学』に転載されることにより，西欧の「人口損失」研究者のなかで話題になったという経緯が紹介されている。Максудов 2017, с.5.

　この初出稿は，本稿文献目録にあるように，1977年に石堂清倫他編『ソヴエト反体制　第2輯　地下秘密出版のコピー』三一書房，所収の「マクスードフ1977論文」として，邦訳・紹介されている。

　他方，ジョレスは，自著1987第3章「集団化」において，集団化期の大飢饉に伴うソ連人口減少の推計値の典拠として，自身が英訳と出版を担当したMaksudov 1981論文を挙げている。邦訳73頁。

ロシア革命後の内戦期とも重なる 1919〜21 年大飢饉における餓死と餓死の恐怖が人間関係にどのような影響を与えたかを社会心理学的に考察したソローキン（1889-1968）原著（1922 年最終校正）の英語版が，彼の死後 1975 年に米国で刊行された。原著は革命政府の検閲制度を出し抜き，反ボリシェヴィキ系印刷所で組版され最終校正用のゲラまで出たが，検閲当局の知るところとなり組版が破壊された。ソローキン夫妻は 1922 年 9 月，国外追放となったが，その際，最終校正刷りを内密に持ちだすことができ，50 年後に英語版が漸く刊行されたというわけである。Sorokin 1975, pp.vii-viii. ソローキンはエスエル党員でケレンスキー内閣秘書官を務め，10 月革命後の憲法制定議会選挙で当選した。

4．Maksudov2008, p.123.
5．Zinoviev 1983，Levada 1993 のほかに，ノーベル賞作家スヴェトラーナ・アレクセーヴィチの近著『セコンドハンドの時代』も「赤い時代」の「ホモ・ソヴィエティカス」概念の「普及」に寄与している。
6．Айтматов 1984, cc.127-141, 邦訳 176-196 頁。
7．Maksudov2008 は「集団化の諸段階」，「服従に帰する」「無神経」「残りの人間」の考察を含む。
8．Maksudov 2008., pp.126-127.
9．Ibid., pp.127-128
10．Ibid., pp.128-130
11．Ibid., pp.130-132
12．Ibid., pp.132-134
13．Sorokin 1975, p.105
14．Zhores Medvedev 1987, pp., 183, 237, 418 拙訳 144, 183, 321 頁。
15．Ibid., p.414. 拙訳 317-318 頁。
16．Ibid., pp. 316-324, 412-421. 拙訳 183-185, 316-324 頁。
17．ジョレス・メドヴェージェフ他 1999，17-18 頁。
18．Medvedev, Roy&Zhores 1975, pp.183-184. 邦訳 199 頁。

参考・引用文献一覧

【邦語文献】

伊東孝之 2015「世界戦争 100 年と東欧―二つの忠誠心の間で―」『ロシア・東欧研究』44

大内力 1969『日本における農民層分解』東京大学出版会

――1970『農業経済学序説』時潮社

大沼盛男・佐々木洋・山村理人共編 2000『ロシア極東の農業改革』お茶の水書房

河西勝 1992『農業資本主義：その論理と歴史』世界書院

V・V・コンドラーシン（半谷史郎訳）2001「1918 年から 1922 年のヴォルガ地方における農民運動」『ロシア史研究』2001 年第 69 巻

佐々木洋 2022「農民が合唱しない労働者だけの革命歌はただの葬送歌に落ちぶれる；GHQ 顧問・米国農務省専門家 W・ラデジンスキーのいまひとつの貢献」『札幌学院大学経済論集』17

下斗米伸夫 2016『宗教・地政学から読むロシア：「第三のローマ」をめざすプーチン』日本経済新聞出版社

――2019『神と革命：ロシア革命の知られざる真実』筑摩書房

新実治一 2011『全ロシア憲法制定会議論』法律文化社

原暉之・兎内勇津流・竹野学・池田裕子編著 2023『日本帝国の膨張と縮小―シベリア出兵とサハリン・樺太』北海道大学出版会

マクスードフ・エム 1977「一九一八〜一九五八年間におけるソヴェト連邦の人口喪失」石堂清倫・高田爾郎編

松里公孝 2021『ポスト社会主義の政治―ポーランド，リトアニア，アルメニア，ウクライナ，モルドヴァの準大統領制』ちくま新書
――2023『ウクライナ動乱』ちくま新書
ジョレス・メドヴェージェフ（佐々木洋訳）1996「ロシア人はなぜ死に急ぐ？　死亡率の破局的悪化とその周辺 The Catastrophe of Russia's Health」『アジア・アフリカ研究』1996年第4号
ジョレス・メドヴェージェフ，奥村宏，佐々木洋（報告者）1999『市場社会の警告』現代思潮社（シンポジウム「市場社会と共生の原理」の記録）

【欧語文献】

Alexievich, Svetlana 2016 (translated by Bela Shayevich), *Secondhand time: the last of the Soviets*, Random House
Archie Brown 2009, *The rise and fall of Communism*, Vintage Books; 下斗米伸夫監訳 2012『共産主義の興亡』中央公論新社
Brown, Lester, R. 1980, "Karl Marx was a city boy," *Science*, 209(4462)
Gessen, Masha 2017, *The Future is History: How Totalitarianism Reclaimed Russia*, Granta Books
Carr, Edward. Hallet 1950, *A History of Soviet Russia; The Bolshevik Revolution 1917-1923* Volume One, Macmillan; 原田三郎他訳 1972『ボリシェヴィキ革命 1917-1923』みすず書房，第1巻
Conquest, Robert 1986, *The Harvest of Sorrow: Soviet Collectivization and the Terror-Famine*, Oxford UP；白石治朗訳 2007『悲しみの収穫：ウクライナ大飢饉：スターリンの農業集団化と飢饉テロ』恵雅堂主出版
Graziosi, Andrea 2004-2005,"The Soviet 1931-1933 Famines and the Ukrainian Holodomor: Is a new interpretation possible, and what would its consequences be," in *Harvard Ukrainian Studies 27*
Hryn, Halyna ed 2008, *Hunger by design: the great Ukrainian famine and its Soviet context*, Harvard UP
Lewin, Moshe 1966, *La Paysannerie et le Pouvoir Sovietique, 1928-1930*, Mouton, 荒田洋訳 1972『ロシア農民とソヴェト権力：集団化の研究一九二八-一九三〇』未来社
Maksudov, Sergei.1981, "Losses suffered by the population of the USSR 1918-1958" in Roy Medvedev (ed), *The Samizdat Register II*, Merlin Press.
――2001,"Victory over the Peasantry" in *Harvard Ukrainian Studies*, Vol. 15.
――2008,"Dehumanization: The Change in the Moral and Ethical Consciousness of Soviet Citizens as a Result of Collectivization and Famine" in *Harvard Ukrainian Studies*, Vol. 30.
Martin, Barbara 2011, *The Holodomor Issue in Russo-Ukrainian Relations from 1991 to 2010*, Geneva.
――2023, *Roy and Zhores Medvedev: Loyal Dissident in the Soviet Union*, Academic Studies Press
Medvedev, Roy & Zhores 1975, *Khrushchev: The years in power*, Norton, 下斗米伸夫訳 1980『フルシチョフ権力の時代』御茶ノ水書房
Medvedev, Zhores 1987, *Soviet Agriculture*, Norton; 佐々木洋訳（1995）『ソヴィエト農業 1917-1991』北海道

書房
——1949 2nd ed, *The Practice and Theory of Bolshevism*, Allen & Unwin
——1950, *Unpopular Essays*, Simon and Schuster; 山田英世・市井三郎共訳 1958『人類の将来：反俗評論集』理想社
——1956, *Portraits from Memory and other Essays*, Simon and Schuster; 中村秀吉訳 2002『自伝的回想』みすず書房
Sorokin, Pitirim 1975, *Hunger as s Factor in Human Affairs*, University Press of Florida
Snyder, Timothy 2010, *Bloodlands Europe between Hitler and Stalin*, Basic Books；布施由紀子訳 2015『ブラッドランド：ヒトラーとスターリン大虐殺の真実』筑摩書房
Webb, Sidney & Beatrice 1935, *Soviet communism: a new civilization?* Longman; 木村定，他邦訳 1952-53『ソヴェト・コミュニズム：新しき文明』みすず書房
Alexander Zinoviev 1985 (translated by Charles Janson), *Homo Sovieticus*, Gollancz
【露語文献】以下（　）内の「　」表記は邦訳のない露語書名の仮訳書名

てその日は 100 年以上続く）」), Советский Писатель; 飯田規和訳 1984『一世紀より長い一日』講談社
Алексиевич, Светлана 2013, *Время секонд хэнд*, Время; 松本妙子訳 2016『セカンドハンドの時代：「赤い国」を生きた人びと』岩波書店
Геллер, Михаил 1985, Машина и винтики;история формирования советского человека（『機械と歯車；ソヴィエト人の形成』），London；辻由美訳 1988『ホモ・ソビエティクス：機械と歯車』白水社
Зиновьев, Александр 1991, Гомо советикус; Мой дом--моя чужбина / редактор И.А. Попов], “КОР-ИНФ”; Homo Sovieticus, Alexander Zinoviev; translated by Charles Janson, Gollancz 1985
Под редакцией Г.Ф. Кривошеева 1993, *Гриф секретности снят: потери вооруженных сил СССР в войнах, боевых действиях и военных конфликтах : статистическое исследование*（「機密解除資料：戦争・敵対行為・軍事紛争におけるソ連軍損失」), Военное изд-во
Кривошеев, Г. И. 2001, *Россия и СССР в войнах XX века: Потери вооруженных сил*